

派遣者番号	30K03	氏名	佐野 吾由美
研究主題 —副主題—	外国語でのコミュニケーションを「楽しむ」だけでなく、「使おう」とする児童の育成 —英語が好きでも、外国人との交流に不安がある児童に対する取組—		
派遣先	創価大学教職大学院	担当教官	若井 幸子 ・ 鈴木 詞雄
所属校	立川市立若葉台小学校	校長	井上 満

キーワード：外国語活動、交流、スカイプ、留学生

1. 研究の目的・主題設定の理由

今日の社会情勢を受け、外国語活動の授業が重視され、2020年から全面実施される小学校学習指導要領では第3学年から外国語活動が始まり、第5学年からは教科化される。私は、2016年度に東京都教育研究員として、外国語活動で児童がコミュニケーション能力を高めることについて研究してきた。目指す児童像を「外国語活動を用いてコミュニケーションを図ることを『楽しむ』児童」とし、実践もしてきた。ここで言う「楽しむ」とは、外国語を用いて、コミュニケーションをする中で、相手の思いを理解できた、自分の考えが伝わったという嬉しさや喜びを感じることに定義した。児童相互に共感的な言葉掛けをすることや振り返りカードを活用することで、友達のよさを発見し、もっと関わりたいという気持ちに変化させることができた。目的としていたコミュニケーションを「楽しむ」児童の育成やコミュニケーションの素地を養うという目的はほぼ達成されてきたと考える。しかし、児童間の交流から離れ、実際に外国人と交流したとき、今まで習った英語を積極的に使う児童が少ないことを歯がゆく思った。児童が思わず使いたくなくなってしまうような、いつの間にか必死で英語を使ってしまったというような活動や学習スタイルとなるよう工夫し、検証する。

2. 研究方法

本研究の目的は、外国語活動において、ゲームやアクティビティで楽しむのではなく、必然性をもった上で実際の外国人と交流する機会をもった活動を行うことである。児童がもっている不安

な気持ちをなくすために、スカイプ交流や留学生が実際に来校しての直接的交流をどのように組み立てていけばよいのかを提案する。

今回交流の一つとして使用するスカイプについて、森(2016)は、「スカイプはコミュニケーション能力を伸ばすのに適している」という。しかし、「スカイプを使用するときには原稿を読むのはいけぬ」と述べている。今回の交流活動では、反応の大切さを重視し、会話の中で繰り返したり、うなずいたりといった表現を取り入れ、暗記大会にならないよう指導していく。

(1) 検証活動

都内小学校第5学年・第6学年外国語課外活動を希望した23名を対象に検証活動を行う。約12日間、休み時間や放課後を使って活動する(表1)。事前・スカイプ後・交流後・2ヵ月後の計4回、質問紙調査を実施する。

表1 主な活動内容

始業式後	全児童への説明、参加児童募集(10分)
スカイプ準備	スカイプ交流に向けての準備(4日間)
スカイプ交流	準備(15分)スカイプ交流(45分)振り返り(15分)
直接交流準備	交流に向けての準備(5日間)
直接交流	準備(5分)交流(70分)
振り返り	アンケート、児童相互の交流(30分)

(2) 不安の減少に必要なと思われる手だて

ア 国籍も様々な「本物」の外国人と触れ合い、「何のためにするのか」という『動機付け』をする。

イ 「正確でないと、英語は話せない神話をなくす」。今までに習った知っている限りの単語を駆使して、ジェスチャーを交えながら「伝

えたい」という思いで交流することを指導する。

ウ グループで助け合いながら交流し、振り返りで互いを認め合う場を設定する。

エ リハーサルをし、足りないものを話し合わせる。それでも不安な児童に対しては、教員が個別で一緒に練習するなどの時間を確保する。

オ 全員の児童が全員の留学生と交流できるよう相手を替え、何度も繰り返す。

3. 検証結果

児童は、スカイプ交流でも直接交流でも、はじめは何を言っているか分からなかったり、うまく伝えられなかったりしたことが多かった。だが、相手を変え、2回・3回と繰り返していくことで、児童の不安も減り、工夫も増し、グループで協力しながら安心して交流するようになった。伝えるために、今まで習った知っている限りの単語を駆使して、ジェスチャーを交えながら「伝えたい」という思いで交流するような変容も見られるようになった。

検証の結果を行うための外国人と交流することに関する気持ちアンケートでは、活動をするごとに不安な気持ちが減って、安心の気持ちが増えていることが分かる(図1)。今回は外国語の授業でなく、希望者が集まる課外活動であったので、児童は皆、外国語活動が好きで、授業でも積極的に参加している児童であった。だが、英語が好きな児童でも活動前には、不安をもっている児童が約半数もいた。今回のような手だてを大切に交流活動を行うことで、児童の外国人との交流に対する不安は減った。

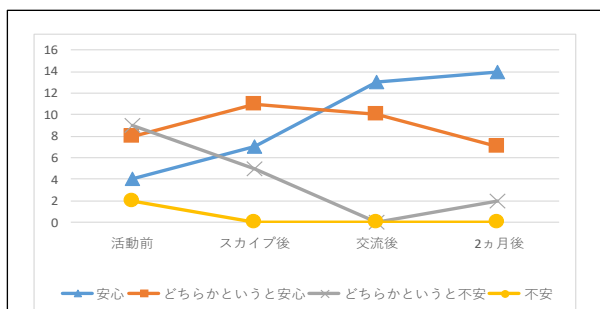


図1 外国人と交流することに関する気持ち

児童の振り返りには、「校長先生という英語の単語が分からなくても、知っている英語を使って説明したら、なんとなく通じたのでほっとしました。」のように、知っている限りの単語を駆使して伝えようとして伝わって安心したこと(手だてイ)や、「全てのグループが留学生に何かを教える時間を設けたことで、全員の留学生と英語で話して伝えることができた。」など、動機付けや繰り返しのよさ(手だてアオ)を書いている児童もいた。だが一方、今回の結果は、交流後の興奮であって、一時的な結果ではないかとも疑い、2ヵ月後に同じアンケートを実施した。結果、2ヵ月後においても児童の気持ちに大きな変容はなく、*t*検定においても有意差なしと判明した(表2)。

表2 交流後と2ヵ月後の安心感(不安感の低さ)の*t*検定の結果

	人数	平均	標準偏差	<i>t</i>
交流後	23	3.57	.507	0.371***
2ヵ月後	23	3.52	.665	

****p*<.001

4. 研究の考察

本研究を通して、外国語活動ではゲームやアクティビティだけでなく、実際に外国人と交流する活動が必要不可欠だと感じた。直接的な交流活動をする、児童は英語を好きになったりモチベーションが高まったりはするが、必ずしも不安が減るとは限らない。交流活動を意義あるものにし、児童が安心して取り組めるようにするためには、今回紹介した手だてはもちろん、児童の実態に合わせ、それ以外の手だても随時検証していく必要がある。

5. 今後の展望

今回は授業でなく、課外活動で実施した。今回と同様の指導を40人のクラス規模で複数の学級で行うには、今回と同様の指導や活動は困難であると予想される。また、参加した人数も少ないため、この結果のみで結論を述べるのではなく、更に授業で交流活動を行い、多くの人数での実践例を検討するなど、研究を継続する必要がある。